

中国古代都市遺跡の現状と問題点

——1993年、陝西、山東、山西、河南、河北省の都市遺跡を見学して——

江 村 治 樹

目 次

はじめに

- 1 秦都咸陽遺跡
- 2 曲阜魯故城
- 3 臨淄故城
- 4 城子崖遺跡
- 5 曲村晋侯墓地
- 6 侯馬古城群
- 7 太原晋陽故城
- 8 新鄭鄭韓故城
- 9 温泉州城遺跡
- 10 鄭州鄆故城
- 11 北京琉璃河古城
- 12 北京寶店古城
- 13 易県燕下都
- 14 平山靈寿古城

はじめに

1993年3月から8月まで、文部省派遣の在外研究員として、北京大学に滞在する機会をえた。北京大学滞在は、中文系の裘錫圭先生のもとで、主として中国古代の出土文字資料の調査、研究をすることが目的であったが、この間、機会を見付けて華北地域の古代都市遺跡の調査を行った。時間的な制限もあり、部分的な調査にとどまらざるをえなかったが、いくつかの新しい知見を得ることができた。今後の調査、研究に資することもあるのではないかと考え、調査の概要を報告する。

1 秦都咸陽遺跡

5月4日、陝西省考古研究所の焦南峰氏の世話で、同研究所の段清波氏に秦都咸陽宮殿遺跡⁽¹⁾を案内してもらった。段氏は、宮殿遺跡の近くにある工作站到、西安から週何回か通って

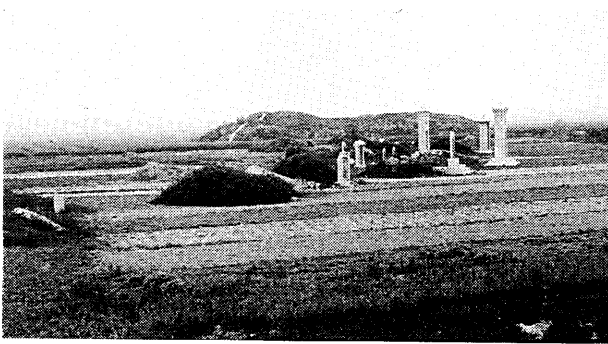


図1 秦都咸陽一号宮殿遺跡

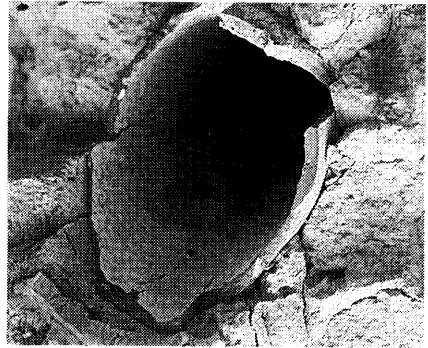


図2 牛羊溝の陶導水管

いるとのことであった。第一号宮殿遺跡は、渭河北岸の河岸段丘上の端近くにあり、南は渭河まで小麦畑で、さえぎるものがない非常に見晴らしのよい所にあった。河岸段丘は高さ10m近い断崖となっており、すぐ真下に牛羊西村の農家の屋根が見下ろせた。段丘上はやはり小麦畑で、北方数キロにもう一段段丘があり、その上部には前漢の帝陵やその陪冢が点在していた。西北に恵帝の安陵、北に趙王如意墓、東北に高祖の長陵、呂后墓といった具合である。

一号宮殿遺跡の西側の建築基台はまだ残存していた（図1）。しかし、牛羊溝をはさんだ東側は平らで基台の痕跡すらなかった。その真東1キロほどの所の段丘端に小山があり、これも宮殿の基台ということであった。第一号宮殿遺跡の南側は、畑地と空き地が入り交じり、最近作られた真新しい墓が点在していた。これらの墓には5mを越す立派な墓碑が立てられているものがあつた。このあたりは、明らかに遺跡の分布内であるが、段氏によると、どうしようもないとのことであった。

この遺跡には瓦片が一面に散布していた。瓦片は裏面の形状により大体、素面、麻点紋、布目紋の三種に分類できる。段氏によると、素面が一番古く戦国時代以前のもの、麻点紋がそれに次ぎ、布目紋は漢代に下るとのことであった。したがって、この地には漢代の建築遺跡もあつたことになり、漢の渭城県の所在地ではないかと考えられている。第一号宮殿遺跡東側の牛羊溝の崖面には、瓦片が層をなして堆積し、陶導水管がほぼ完全な形で露出していた（図2）。また、斜面には瓦片とともにスサ混じりの焼けた壁土の魂が散乱し、項羽による焼き打ちの跡をしのぶことができた。

報告によると、宮殿遺跡の付近、牛羊村から姫家道あたりにかけて、宮殿を囲む墙壁が確認されている⁽²⁾。しかし、段氏らの話では、咸陽城の城郭はやはり現在でも未発見とのことである。傾斜地に築かれた城壁は地表に痕跡を留めていない例がみられ⁽³⁾、咸陽城の場合もまだまだ探査が必要なように思われる。

2 曲阜魯故城

5月19日から24日まで、北京大学の留学生とともに、山東省のいくつかの都市遺跡、さらに博物館、大学、研究所の遺物の調査を行なった。

5月19日午前、曲阜ではまず、顔廟の南、劇院の敷地内裏にある山東省曲阜市文物管理局を訪問した。しかし、魯国古城の出土遺物はほとんど工作站と文物局の保管庫にあるとのことで、

見ることはできなかった。また、報告書『曲阜魯国故城』（齊魯書社、1982）出版以後、緊急発掘以外はしていないとのことであった。

午後は、文物管理局から北の城壁まで歩くことにした。まず、明代城壁の北門を出て、堀ぞいに東に進み周公廟に向かった。報告書の地図によると、周公廟のあたりは、広い範囲にわたって版築が見られるが、版築の部分は小麦畑が一段高くなっているようであった。次に、周公廟の東の溝にそって、北方の盛果寺村に向かって歩いた。溝には瓦片、陶片が散乱し、戦国の雲龍紋磚や漢代の雷紋磚などのかけらも混じっていた。しかし、周公廟周辺の版築部分を囲む「牆」は、溝の部分でも確認できなかった。また、漢代の城壁と思われるあたりは、2mくらいの断崖になっており、盛果寺村のあたりから見ると、周公廟一帯は小高い台地状になっているのがよくわかる。だが、城壁らしきものは確認できず、断崖には陶片が層をなして堆積し、建物の礎石と思われるものも露出していた。

盛果寺村の北からは、北方に城壁が断続的に連なっているのが望見できた。近づいて見ると、高さはかなりあり（報告書によると高い所は8m）、版築層もかなり明瞭であった。城壁の外100mほどの所には城濠がはっきりと残っていた（図3）。ただ、水はなく帯状の小麦畑になっていた。北城壁ぞいに西に向かって歩いたが、やはり城壁は断続的に続き、孔林のあたりでは、その上に孔林の塀が築かれていた。魯国故城内のほんの一部を歩いただけであるが、やはり発掘が行なわれている形跡はなかった。

3 臨淄故城

5月21日朝、済南発青島行の旅遊列車で淄博まで行き、そこからタクシーを雇って辛店に向かった。辛店では、山東省考古研究所臨淄工作站を訪問した。工作站は、町の北部にあったが、看板も出でおらず探すのに一苦勞であった。建物自体新しくなかなか立派なものであったが、後で聞いたところによると、看板がないのは盗難を防ぐためということであった。工作站の収蔵庫は、羅勳章所長に案内していただいた。収蔵庫内には、主として后李、大汶口、北辛などの新石器の遺物、臨淄故城周辺の春秋から漢代までの遺物が収蔵されていた。都市研究に重要

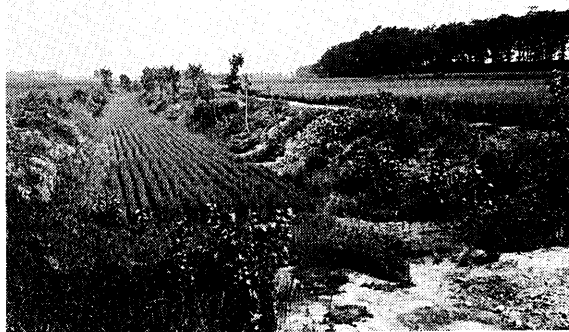


図3 曲阜魯故城北城壁と外壕

な臨淄出土の銘文のある陶片は6つの木箱に収められており（うち豆柄のみ4箱）、箱に入れられていないものも棚一段あった。羅所長によると、陶文の種類は30から40種あり、みな1960年代に農民が故城内で採集したものを買い取ったものという。しかし、最近では農民は全く持ってこなくなっており、発見しても売り飛ばしてしまうようだとのことである⁽⁴⁾。なお、陶豆の柄は、中心の穴が小さいものほど新しいという。

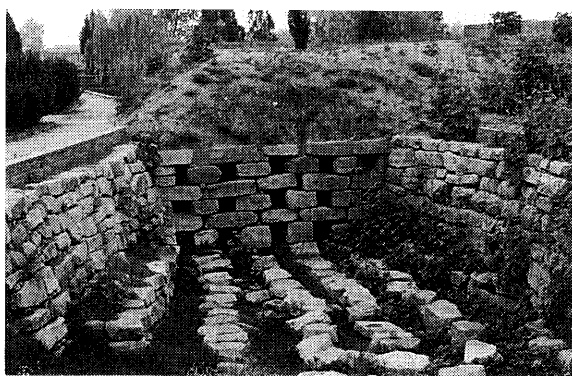


図4 臨淄故城第三排水口（西に向って）

午後は、いよいよ辛店から北東6kmにある臨淄故城に向かった。途中、道路の両側には多数の古墳がみとめられた⁽⁵⁾。故城内は、城内にある齊国故城遺址博物館の楊英吉館長に案内していただいた。まず、城内北東隅、河崖頭の殉馬坑博物館を見学した。殉馬坑は大墓を囲む形に配置されている。博物館は殉馬坑の西面南部の上部に設けられていて、二列に並んだ殉馬を見学できるようになっていた。報告によると、中心の大墓は春秋晩期、齊の景公の墓とされている⁽⁶⁾。また、殉馬坑の北面は75mあり、1964年冬の発掘でその西部の54mが発掘され、145匹の殉馬が発見された。一方、東西両面は長さ70mあり、西面南部30mは1972年春に発掘され、84匹の殉馬が発見された。そして、全体では600匹以上の馬が殉葬されたと推定されている。なお、大墓のあたりは現在、野菜畑になっており、地表にはなんの痕跡も残っていなかった。

臨淄故城の城壁部には四つの排水口が発見されているが⁽⁷⁾、そのうち大城西壁北部の第三排水口を見た（図4）。ここも、見学施設として整備されていた。排水口は、城内の入水部、城壁下の通水部、城外の出水部からなり、みな切り石で構築されている。通水部は、五列三段の通水口が設けられているが、内部は石が交互に組み合わされ、水は通っても人が通れないようになっているという。

次に、小城北壁と大城西壁の交点にある「齊国故城城垣遺蹟」を見た。ここは、城壁の接合部分がわかるように発掘し、覆い屋を作って保存してあった。しかし、鍵がなく内部に入ることができず、窓からのぞくのみであった。ついで、その南にある桓公台上に登った。この建築基台は高さが14mあり、三層の台階状で、南面が広がっている⁽⁸⁾。これは、漢の長安城未央宮前殿や侯馬の平望古城の基台と同じ構造である。この日は天気がよく、桓公台上からは四方がみわたせたが、一面の小麦畑と遠くかすむ村落が見えるだけで、故城の広さがどれだけあるのか見当がつかなかった。

最後に、齊国故城博物館を見学した。この博物館は臨淄県城の西関北部、小城の東壁と大城南壁の交点の西にあり、明清時代の城壁を模した形に作られていた。ここには、故城内や周辺

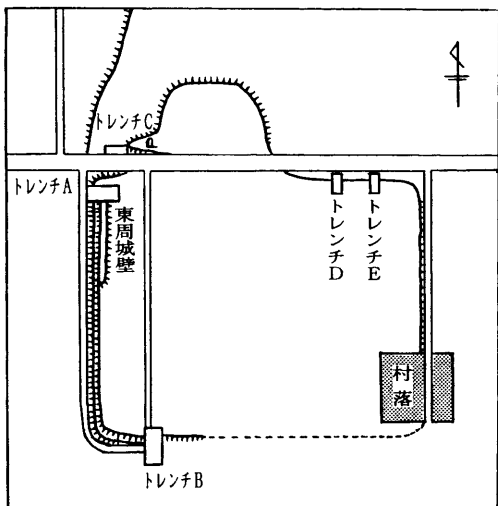


図5 城子崖遺跡概念図



図6 城子崖遺跡トレンチAの覆い屋
(南に向って、中央上部は東周城壁)

の遺跡から出土した青銅器や陶器が展示してあった。なかでも、1992年9月から翌年1月にかけて故城南5kmの商王村一帯から出土した玉器や銀器がめずらしかった。銀器は戦国のもので、耳杯、各種の匱、勺などがあり、耳杯の耳の裏には銘文があった。

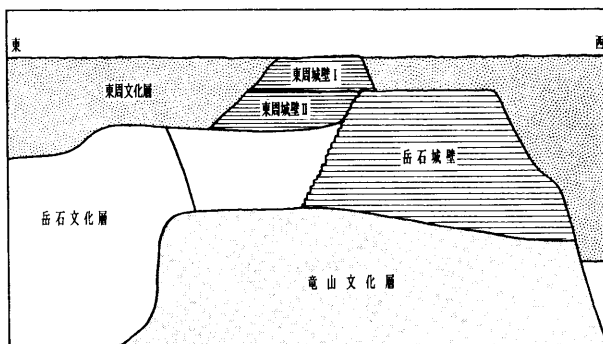


図7 城子崖遺跡トレンチA断面

4 城子崖遺跡

5月22日朝、済南からタクシーで東方の章丘市龍山鎮の城子崖遺跡に向かった。大体、車で1時間の距離であった。城子崖は1930年に発掘が行われ、龍山文化の発見地として有名である。この時、城壁も発見されたが年代に関して問題とされ、ようやく1990年の再発掘で龍山期のものと確認された⁽⁹⁾。

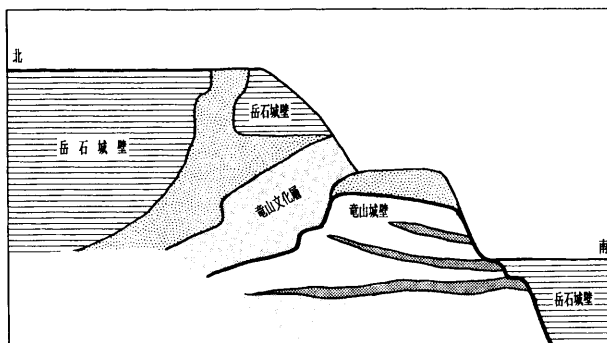


図8 城子崖遺跡トレンチB断面

遺跡は、北に緩く傾斜した台地上にあり、西側数100mのところは川が深く切れ込んでいる。遺跡自体は、北側に出っ張りがある方形の台地状をしており（図5）、東西、南北それぞれ450

mの大きさである。川のある西側の断差は5mくらいあるが、東側は1mほどである。南側は3mくらいであるが、北側の断差は相当ありそうであったが確認できなかった。地表の城壁は西側北部に1mくらいの高さでわずかに確認できるだけである。全体に城壁内部が詰まった台地とみなすことができ、上面は小麦畑になっていた。

遺跡の周縁にはいくつかトレンチが入れられ、城壁の確認が行なわれていた。西壁北部のトレンチAは覆い屋が作られて保護され、見学できるようになっていた（図6）。ここでは、西壁の断面がわかるようになっており、龍山文化層の上に、岳石期（二里頭期から二里崗期）の城壁が乗り、さらにその上に東周期の城壁が乗っているのがよくわかった（図7）。東周期の城壁の版築層は薄く、I、IIの二層に分かれており、新しいI層は譚国の城壁ではないかということである。南壁西部のトレンチBは、1990年から91年にかけて発掘が行なわれたもので、覆い屋はまだ真新しくあった。こちらでは龍山期の城壁が確認でき、その上に岳石期の城壁がかぶさるように乗っていた（図8）。龍山期の城壁には灰層がはさまり、版築の跡もはっきりしなかった。聞くところによると、版築によったものではないらしいということであった。岳石期の城壁は版築は明瞭で、層の厚さは10から15cm、円痕は径2から3cmとのことであった。トレンチC、D、Eはやはり城壁を確認するため発掘中であったが、岳石期と思われる版築層が明瞭に認められた。また、掘り土の中には黒陶片や灰陶片がたくさん混じっていた。

以上のように、城子崖遺跡は龍山期から東周時代にかけての長期にわたる貴重な都市遺跡である。しかし現在、発掘はまだ城壁の確認にとどまっているようであった。この遺跡は、長期にわたって使用され、城壁内部が詰まったテベ状になっている点、大きすぎない適当な規模である点など、古代都市の発展過程を明らかにするには恰好のモデルである。将来の計画的な発掘が期待される。

なお、遺跡の東方約1kmほどの所に「章丘城子崖遺址出土陶器収蔵処」があり、見学することができた。一つの平屋の建物に龍山、岳石、東周期の陶器が収蔵されていた。

5 曲村晋侯墓地

6月2日から4日まで、北京大学考古系の徐天進氏の案内で、駒沢大学の飯島武次氏や北京大学の留学生とともに山西省の侯馬市とその周辺の遺跡、遺物を見学した。そのうち、2日と3日の二日間にあたって、北京大学考古系と山西省考古研究所が合同で発掘中の曲村晋侯墓地进行訪問した（以下図9参照）。

曲村は、侯馬から東、曲沃を經由して北方の襄汾へ向かう道の途中で東側に10kmほど入った所にある。ここは、曲沃盆地の北縁で、南に向かって緩く傾斜し、南方は汾河の支流の滏河が流れている。墓地は、西に曲村、東に天馬、北に北趙、南に毛張という四つの村の中間の小麦畑の中に位置していた。北に山が連なり、南が開けていて、飯島氏によると周原とよく似ているとのことであった⁽¹⁰⁾。

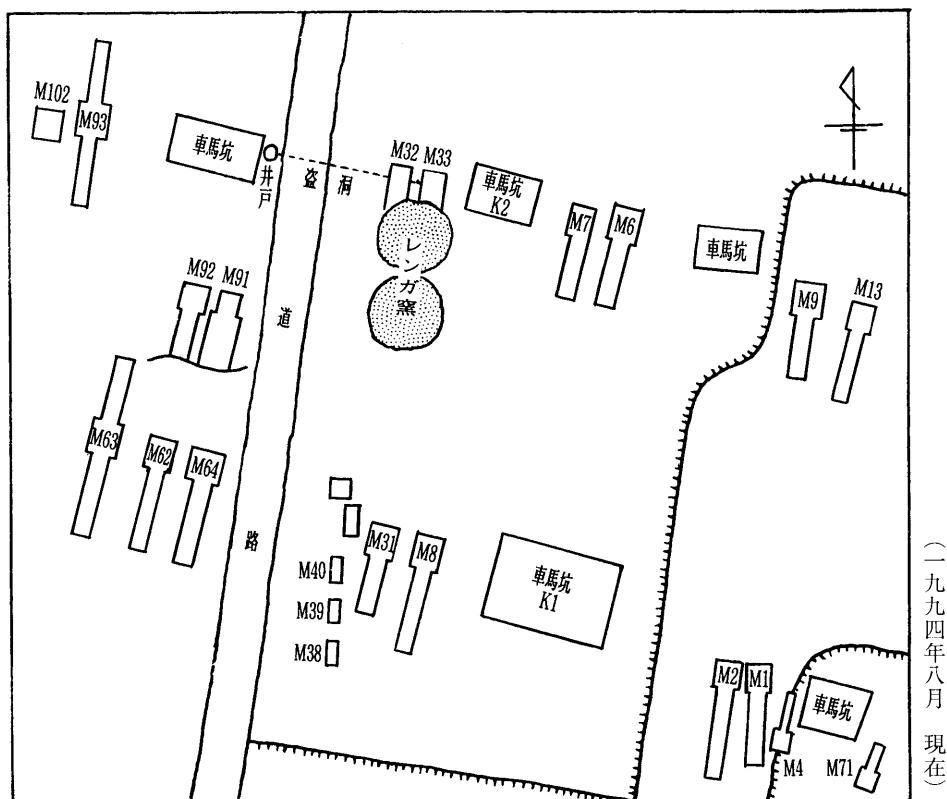


図9 曲村晋侯墓地概念図

曲村から天馬にかけての地域は、1979年以後、本格的な調査が行なわれるようになり、西周中、晩期の晋文化の遺跡が広く分布することが明らかになった。そして、この地域が晋国早期の都城である古絳の所在地ではないかと考えられてきたが確証はなかった⁽¹¹⁾。ところが、1987年以後、盗掘がひどくなり、1992年の春に現在晋侯墓地と呼ばれている所で緊急の発掘が行なわれた⁽¹²⁾。この時、1号墓と2号墓の大型の夫婦併穴合葬墓が発掘され、これらの墓は晋国諸侯クラスの貴族墓であり、ここが晋国高級貴族墓地であることが明らかになった。しかし、ここが晋侯墓地と確定されたのは1992年冬になってからである。この時、甲字形大墓5と祭祀坑が発掘され、このうち8号墓と13号墓から晋侯の銘文のある青銅器が出土したのである⁽¹³⁾。8号墓は、西周晩期、周宣王の時期の晋献侯か穆侯ではないかとされている⁽¹⁴⁾。

晋侯墓地を訪問した時、8号墓の発掘はすでに終わり、墓坑はすでに埋め戻されていた。しかし、出土遺物は山西省考古研究所侯馬工作站の一室で見ることができた。鼎、壺、簋、盃、爵、兔尊、鐘などの青銅器が床に雑然と置いてあった。その他、金器や石磬があったが、玉器の種類と分量の多さには目を見張った。これらは皆、『文物』1994年1期に紹介されているので贅言を要しないであろう。

訪問時の晋侯墓地は、盗掘に備えて相当のものしい雰囲気であった。墓域内には近代のレンガ窯が2基あったが、その上にはサーチライトが備え付けてあった。また、小銃や自動小銃を持った公安が警戒にあたっていた。遺跡は、8号墓の西側の陪葬墓3基（M38, M39, M40）と東側の車馬坑、32号墓が発掘が終ったところでまだ埋め戻されておらず、さらに31号墓が発掘中であった⁽¹⁵⁾。陪葬墓3基は、まだ骨や副葬品を取り出す前であった。32号墓は盗掘がひどく、いくつもの盗掘の痕跡があった。聞くところによると、盗掘者は道路の西側の井戸から横穴を掘り、この墓まで掘り進んだとのことで、確かに底の方の壁面に盗洞があった。発掘中の31号墓は、ちょうど郭板の所まで掘り進められ、腐食した木材の痕跡や、木炭が現れていた。この墓は盗掘の形跡がなく、大いに期待が持てるとのことであった。

徐天進氏によると、この墓地の周囲には、ボーリングによって塚が確認されたとのことである。また、東北の塚の内側には版築の壁もあるという。しかし、道路から西は塚がどうなっているか不明という。ただ、いくつかの大墓がボーリングで確認されているので、西にも伸びているだろうとのことであった。また、晋の国都の探索も進めているが、まだ西周時代の城壁は発見されていないとのことである。

ただし、戦国から漢代の城壁は、毛張村の西南部に発見されており、毛張古城と呼ばれている。毛張村の西南に神嶺と呼ばれるL字形の土塁があり、版築の跡が確認できる。しかし、報告によると、この土塁の下に戦国から漢代の城壁の基部があり、土塁と微妙にずれるとのことである⁽¹⁶⁾。ボーリングによって西壁600m、南壁540mが確認されている。これは、戦国漢代の都市としては小さい方であり、戦国時代以後、この地はもはやかつての面影はなくなっていたと思われる。

〔附記〕この時の訪問以後も、晋侯墓地の発掘は継続して行なわれ、とくに道路の西側の発掘が進められた。1993年下半年には、未盗掘の64号墓、62号墓、63号墓の三墓が発掘され、大量の遺物が出土した⁽¹⁷⁾。64号墓からは、晋侯邦父の銘のある銅器が出土し、残りの二墓は晋侯の正夫人、第二夫人の墓とされている。副葬品から、三墓は西周末年のものであるが、邦父がどの晋侯であるかは明らかでない。

その後、1994年8月末、太原での晋文化国際学術討論会に出席しており、再度、曲村晋侯墓地を訪問する機会を得た。討論会にあわせて5つの墓が発掘され、副葬品を取り上げる直前の状態で保存されていた。

道路の東側の33号墓は二層台の上に戦車や車輪が副葬されていた。深さは12mもあるが、他の遺物は道路西側の井戸から32号墓を貫いた横穴によって盗掘されていたという。墓の南側はレンガ窯があるために掘られていなかった。

道路西側の4墓はすべて未盗掘であった。91号墓と92号墓は甲字形の夫婦併穴合葬墓である。91号墓は、墓道より墓室が狭い特殊な形をしており、被葬者は男性で多数の銅容器、石磬、玉器が副葬されていたが、とりわけ車馬具の副葬が多いのが目を引いた。92号墓も多数の銅器、

玉器が副葬され、棺内の朱が鮮やかであった。93号墓は中字形の大墓で、墓室は石で築かれていた。北側の墓道は階段状であり、南側にはたくさんの馬の頭が埋められていた。墓室内には、大型の列鼎や編鐘が認められた。102号墓は、墓道がなく、被葬者は女性という。墓室内に、銅壺、棺飾り、列鼎が見られたが、副葬品は少なかった。

今回聞いた所によると、墓地の周壕ははっきりしないとのことであった。そして、墓はこれ以上西にはなく、この墓地の発掘はこれで終り、次はいよいよ本格的に晋の都城の探索を行なうとのことであった。

6 侯馬古城群

6月4日、山西省考古研究所侯馬工作站の呉振祿氏の案内で、侯馬市の牛村、平望などの古城群と関係の遺跡を見学した。午前中はまず、呈王路建築群が発見された場所に案内してもらった（図10）。報告によると、建築群は呈王古城の東1200mの所で、呈王路建築中に発見され、1984年から86年にかけて発掘が行なわれた⁽¹⁸⁾。13号地点では、「堂」を中心に「庭」を囲む形で東西の「廂」があり、その全体が墻垣で囲まれた建築群が発見され、これは宗廟ではないかと考えられている。また、その西60mの所の26号地点では馬、牛、羊、犬などを埋めた130もの祭祀坑が発見され、13号地点の建築址と関係があるのではないかとされている。しかし、これらの遺跡は呈王路と名付けられた広い道路の下になっていた。ここでは、呈王路の北、工人文化宮の敷地内、祭祀坑から北100m足らずの所にある5号地点を見た。ここは空地になっていたが、他の地面よりやや高かった。呉氏によると、東西45m、南北26mの建築基礎が確認されているという。しかし、まだ未発掘であった。

この建築群の真南には、侯馬盟書が出土した盟誓遺跡があり、その上に建設された侯馬発電廠の高いエントツが望めた。また、南から東にかけては、祭祀坑や排葬墓地⁽¹⁹⁾が、この建築群を取り囲むように発見されている。呉氏によると、この建築群は晋国の宗廟と関係があり、盟誓遺跡も公的なものとみなせるという。

しかし、13号地点の建築群と祭祀坑は離れすぎており、宗廟であるか問題である。また、宗廟であったとしても、侯馬古城群に関係する宗廟であるかは問題である。第一に、外城壁を想定しても、宮殿が存在したと考えられる古城群から離れすぎている⁽²⁰⁾。第二に、牛村古城の南250mの所から祭祀坑を伴う宗廟と思われる建築址が発見されているが、この時代は古城群の年代とほぼ合う⁽²¹⁾。しかし、呈王路建築群はこれより早く、新田遷都まもない早い時期のものでされている。そうすると、初期の新田は呈王路建築群のあたりに建設され、古城群はその後建設された可能性が出てくる。同じ品字形の宮殿区を有する邯鄲故城も、最初に大北城が築かれ、後に王城が築かれたとする説がある⁽²²⁾。しかし、上述の可能性は実証を伴わないあくまで推測にすぎない。晋都新田の構造の解明には、侯馬周辺の遺跡の継続的探査や、都城発展の過程の検討など、課題は多く存在する。

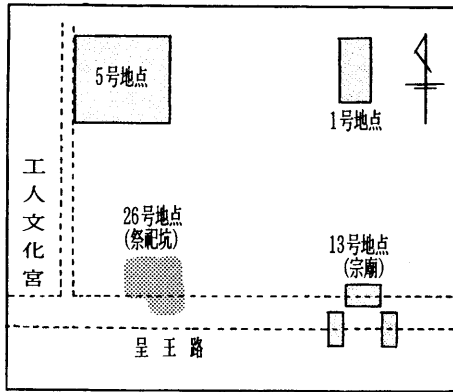


図10 侯馬呈王路建築群配置概念図

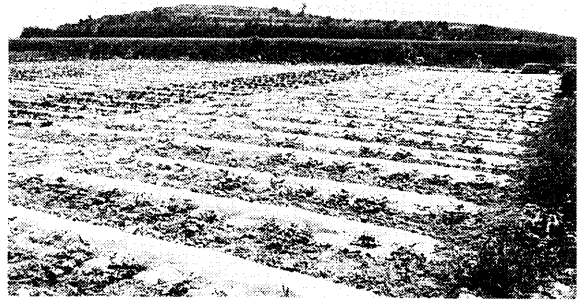


図11 侯馬平望古城の基台（東北に向って）



図12 侯馬牛村古城の基台（北に向って）

この日、引き続き、侯馬市西北郊外の古城群を参観した。まず、小麦畑の中にある馬荘古城の基台を遠望した後、平望古城の基台に向かった。この基台は六段ほどの階段状になっており、下から二段目の南面がかなり広く、上面は畑に

なっていた(図11)。漢長安城の未央宮前殿の基台と似ているが、規模はかなり小さい。基台上には瓦片が散布していたが、裏面はみな素面であり、戦国以前のものと思われた。ついで、牛村古城の基台に登ったが、こちらは更に小さく高さも低かった(図12)。とくに、南面がざっくり削り取られ畑になっていた。以上の基台にはみな遺跡表示もなく、保存ははたして大丈夫なのかと思われた。

平陽機械廠内の北辺では、牛村古城の南城壁と城壕、住居址の発掘が進行中であった。城壁は、基底を深く掘り込んだ上に版築で築いた相当しっかりした構造とのことであった。しかし、このような古城群の城壁はすべて地下に埋もれ、一切地表面では確認できないという。なお、最近、山西省考古研究所編『侯馬鑄銅遺址』(文物出版社, 1993)が公刊され、工場内の遺跡の状況がくわしくわかるようになった。22号遺跡は工場西部のエントツの下になっており、2号遺跡は工場東正門の近くの空地になっているという。これによっても、侯馬の重要な遺跡の発見は、ほとんど建設に伴うものであることがわかる。今後、晋都新田の都市構造の解明には、計画的な発掘が必要と思われるが、現在、いかなる計画があるかは明らかでなかった。

7 太原晋陽故城

侯馬の調査の帰りに太原に立ち寄り、6月5日から8日にかけて、山西省考古研究所の張頌、陶正剛氏の配慮で太原周辺の遺跡、遺物を見学することができた。

文廟の山西省博物館の収蔵庫では特別に侯馬盟書を見せてもらった。文字の残りの良いという圭形盟書5点を見たが、文字はほとんど消えかかっていた。やはり、文字はしだいに退色しているようであった。ただ、水で湿らすと文字が浮かび上がってくるということで、『侯馬盟書』（文物出版社、1976）の写真はそのようにして撮ったとのことである。盟書の厚さは、中央部は3～4mmだが先端と末端は1～2mmと薄く、明らかに表面を磨って整形してあった。また、先端部の側面の角を磨って面取りがしてあるものもあり、きわめて丁寧な作りという印象であった。

6月7日には、研究所の侯毅、王虎忠氏の案内で太原市西南郊、春秋時代末趙氏の本拠地であった晋陽故城を見学した。この城は、前453年、知伯に率いられた韓氏、魏氏が、趙襄子を水攻めにした所として有名である。その時、城壁は水につかり上部三版を余すのみであったという。故城の所在地は、西に山地がせまり、東南に向かって緩く傾斜しているが、北部の古城営村のあたりは水田になっており、ほとんど傾斜は感じられなかった。

1961年の調査によると、古城営村の西1300mの所に、東周の晋陽故城の西壁が高さ7m、長さ900mにわたって残っているとあるが⁽²³⁾、そのようなものは見あたらなかった。また、古城営村のすぐ西に北斉、隋唐時代の大明城と思われる城址があるとされているが、これも地表上には確認できなかった。ただし、羅城村の東には北漢劉致遠の城とされる「羅城」の西北角と北壁の一部がまだ残っていた。

7日は夕暮れも近く雷雨にもなったため晋陽故城の痕跡は発見できなかった。そこで、翌8日に改めて調査に向いた。この日は、南城角村を探し、タクシーの運転手の協力で西南角附近の城壁を見つけ出すことができた。しかし、城壁は破壊され、その上に農家が建っていた。城壁の跡は幅10m、高さ1mほどが建物の下に確認できただけである。

なお、7日には、晋陽故城の西北で発見された金勝村251号大墓の所在地にも案内してもらった。この墓は、1988年に発掘され、大量の青銅器、玉器が発見された⁽²⁴⁾。とくに、青銅器は大型で精良なものが多く、また虎型竈など珍品も含まれていた。墓の年代は春秋戦国の交とされている⁽²⁵⁾。出土の青銅器は山西省考古研究所の収蔵庫で見ることができた。やはり、虎型竈は面白く、炊き口の口沿内部には虎の牙までならんでおり、エントツは分解できるようになっていた。また、筒型の量器、毛彫りの射礼図のある匱などもあった。陶正剛氏には、特別に同墓出土の有銘銅戈も見せていただいた。一は「趙孟之御戈」銘の銅戈で長治分水嶺14号墓の戈に似ている。陶氏によると、趙孟は趙簡子鞅のことであり、大墓の被葬者はこの人物であるという。もう一つの戈は「虢城之折戟」の銘がある。この戈は、内と援の上縁が一直線に近く、前者より古く春秋後期のものと思われた。

金勝村251号大墓は、巨大なエントツが立ち並ぶ太原市第一熱電廠の敷地内にあった。墓の跡は山に近い一段高い台地の上にあり、その上に住宅が建っていた。台地の下では小型墓がいくつか発掘中で、填土の取り除き作業中であった。また、周囲にはいたるところ、石灰の白線で

墓坑の位置が示されていた。このあたりは、戦国時代の晋陽故城の墓地であることは間違いな
いであろう⁽²⁶⁾。

8 新鄭鄭韓故城

7月12日、13日、河南省安陽市小屯の殷墟博物館、社会科学院考古研究所安陽工作站および
西北崗大墓群の所在地を訪問した。その後、14日に鄭州に向かい、河南省文物研究所を訪れて
郝本性氏に会い、温県盟書、信陽長台関竹簡を見せていただくとともに、新鄭県と温県の参観
の手配をしていただいた。

長台関竹簡は2本見たが、ともに遣策で長い試験管に入っていた。文字はきわめて鮮明であっ
た。温県盟書は3点見たが、2点は大型の圭形、1点は小型のずんぐりした圭形であった。と
もに墨書の文字は鮮明であった。材質は黄色がかった灰色の頁岩で、厚さは2～3mmあった。
作りは侯馬盟書に比べかなり雑なようであった。郝氏によると、模本の出来栄えが良くなく、
報告書の出版は何時になるかわからないとのことであった。

15日、新鄭県文化局内にある河南省文物研究所新鄭工作站的蔡全法氏に鄭韓故城を案内して
いただいた。まず、県城内東部の新鄭県文物保管所（県文物管理委員会）の資料室を見学した。
裴李崗遺跡の遺物、唐戸遺跡の青銅器、故城内の倉城鑄鉄遺跡の陶範などの他、戦国韓国の鉄
権や巨大な門枢（城門の扉の軸受）などが展示してあった⁽²⁷⁾。

ついで、県城西北部の宮城遺跡を見た。報告によると、宮牆は東西500m、南北320mとある
が⁽²⁸⁾、宮城内と思われる所の地面の一部はやや高くなっているようであった。蔡氏の話では、
この遺跡は道路を作ろうとして発見され、工事は中止されたとのことである。確かに道路を作
るため地面が深さ50cmほど掘り込んであり、崖面には戦国、漢の瓦片がかなりはさまっていた。

この後、西城北城壁に向かった。北城壁はほぼ完全に残っているが、県城から北に向かう道
路によって断ち切れ、城壁上の両端には新しい亭が建てられていた（図13）。城壁の外、道路
の東側は軍隊の駐屯地になっていた。このあたりの城壁は高く、高さ30m、基底部の幅60m、上
部で幅5～6mはあるという。軍隊の駐屯地のそばにトンネルが掘られていたが、壁面には版築
層が明瞭に残り、天井には円痕がくっきり見えた。城壁の上からは見晴らしがよかった。東城
と西城を分ける城壁はかなり低く残りもよくないようであった。東西城を分ける城壁と交わる
北壁の外側には馬面の出っ張りがはっきり残っていた。

城壁から降りて、東城東部の鑄銅作坊遺跡に向かった。この遺跡も道路建設によって発見さ
れたとのことであった。道路の北側は2mほど高くなっており、その北側には城壁が断続的に連
なっていた。道路によって削られた崖面にはかなり完全な形の陶器がいくつも堆積していた。
また、地面上にも陶片の他、陶範や砥石のかけらなどが散乱していた。道路の南側は段差がな
く平らであった。南方の白廟範村の銅兵器発見地に行こうとしたが、道路に大きな水溜まりが
できていてタクシーが通れずあきらめた。

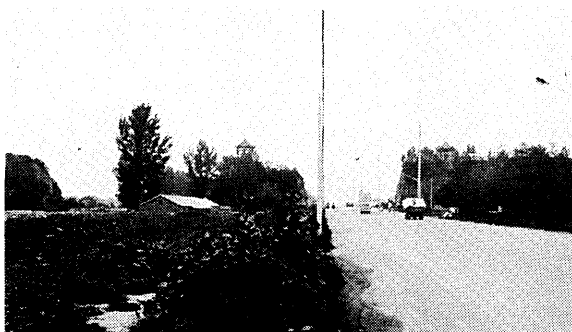


図13 新鄭鄭韓故城北城壁（北に向って）

この他、県城内南部の李家楼の新鄭彝器出土地にも行ったが、住宅の敷地内のゴミ捨て場になっていた。新鄭県城の周辺はいたるところで建物や道路の建設が行なわれており、雑然とした状態であった。これでは、遺跡保存までは到底手が回らないのではないかと思われた。

最後に、新鄭工作站にもどり故城内

出土の陶文を見せてもらった。一字か二字刻まれた陶片が多かったが、中には口沿上面に「公」の印文が三つある完形の円筒形陶量もあった⁽²⁹⁾。ここの陶文はまだ未整理のようで管理も不十分のようであった。

9 温県州城遺跡

7月16日、河南省文物研究所鄭州工作站の宋国定氏の案内で温県盟書の出土地を見学した。

まず、鄭州から北に向かって黄河を渡り、武陟県城を通過して温県県城に入った。温県では県文物管理所で温県盟書を見せてもらった。全部で15点で、みな長い圭形であったが、1点だけずんぐりしたタイプであった。1点のみ先端部にかすかに一字認められたが、他はみな文字はなかった。文字のあるものはすべて鄭州の研究所に持って行かれたとのことであった。色は灰黄土色でナメクジ状の光沢があり、欠けた部分は層状の構造がはっきりした頁岩であった。やはり作りはかなり雑であった。この他、1992年に温県西関の漢墓から出土した「長（張）耳」の印のある陶壺蓋と陶鼎蓋を見た。

午後、県文物管理所所長李海潮氏、県文化局副局長張繼峰氏らの先導で州城遺跡に向かった。来た道を引き返し、趙堡という所で南に折れて邢邱故城に寄って行こうとしたが、またしても水溜まりで車が通れず断念した。そこで、北に折れて武徳鎮に向かった。武徳鎮はすでに州城故城内にある。ここで東に折れてまっ直ぐ進むと西張計村の入口である。この入口で北に折れて進んだ所、村の西北角に温県盟書の出土地があった（図14）。

村の西北角には配電所あり、そこから1980年から82年にかけて大量の盟書が出土した（図15）⁽³⁰⁾。村民の話によると、配電所のすぐ東にある農家からも1936年に盟書が発見され台湾に持って行かれたという⁽³¹⁾。配電所の西側、20～30mの所に1mほどの高さの城壁の跡が残っており、それが州城故城の東北角であった。村民の話では、そこはもと「盟誓台」と呼ばれ、40年前には高さ5m以上、底部30m、頂部10～15mほどあったらしい。しかし、すぐ北を流れる沁河の堤防を築くため土を持って行ってしまったとのことである。

この後、東壁の跡を東南角まで歩いた。途中、東壁の一部がぼつんと一カ所残っている所が

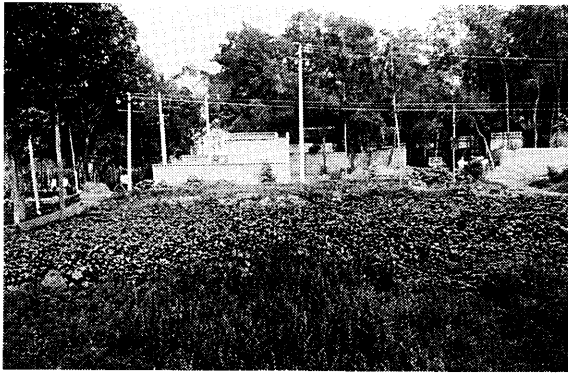


図15 温州古城故城東北角から配電所（温県盟書出土地）を望む

あった。レンガ窯に利用された跡があったが、8～10cmの厚さの版築層が確認できた。東南角の城壁は『』形に残り、堀に囲われた農家の敷地内にあった。高さは5～7mあり、上部はレンガ窯に利用されていた。頂上からの展望は良く、一面平坦で故城の内外はトウモロコシやその他の作物の畑が広がっていた。

10 鄭州邨故城

7月17日、国家文物局編『中国文物地図集—河南分冊』（中国地区出版社、1991）を手がかりに、鄭州市東郊の都市遺跡の調査を試みた。まず、祭城村に向かい、西周時代の祭伯の国、春秋時代の鄭大夫祭仲の采邑とされる城址を探した。村の周辺は低地のようでハス畑が広がっていた。タクシーの運転手の努力にもかかわらず、城壁らしきものは確認できなかった。

ついで南に向かい邨故城を探した。故城は、春秋時代、前711年に晋と楚が戦った「邨の戦」の地とされている。『文物地図集』の記述のとおり、古城村の南、隴海鉄路のすぐ北側に南城壁を確認できた。古城村の南からは、東方に断続的に延々と伸びる城壁が望めたが、西方は崖になっていてどうなっているかわからなかった。道路によって切断された城壁の高さは4～5mあり、断面には東周時代の陶豆柄がはさまっていた。しかし、版築の層は不明瞭であった。北、東、西の城壁は確認できなかった。

11 北京琉璃河古城

6月22日、北京からタクシーで周口店を經由して琉璃河古城と竇店古城をめぐる。琉璃河古城は、北京市西南約50km、石家荘へ向かう京石公路から少し東に入った所にある（図16）。この古城の東南の董家林村と黄土坡村の間、京広鉄路の両側には大規模な西周時代の墓地が発見され注目された。この墓地は1973年以来発掘が続けられ、200近くの墓と約30の車馬坑が発見さ

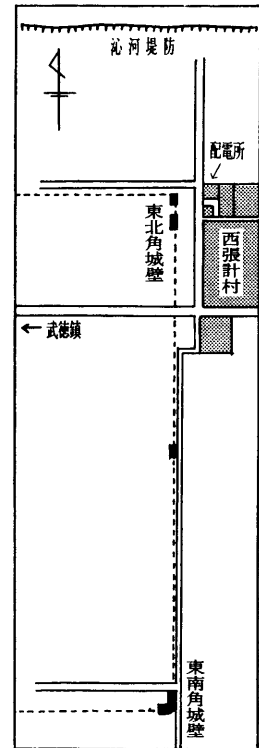


図14 温州古城遺跡概念図

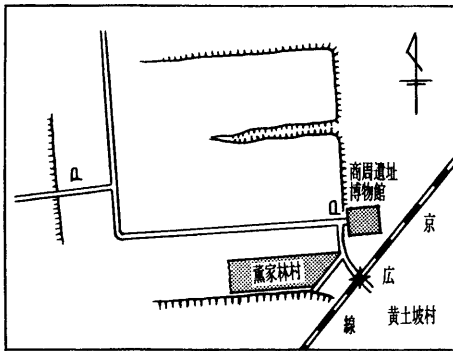


図 16 北京琉璃河古城概念図

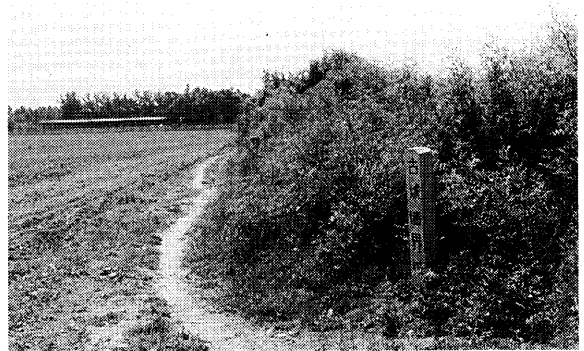


図 17 北京琉璃河古城東北角（南に向って）

れている⁽³²⁾。中には「匱侯」の銘文のある青銅器も発見されていて、この墓地は燕国の墓地と考えられている。また、1986年には四つの墓道を持つ燕侯の墓と思われる大型墓も発見されており、琉璃河古城は燕国都城である可能性が高いとされている⁽³³⁾。

報告によると、古城址の北壁は850mで殷末に建造されたものとされている⁽³⁴⁾。実見したところ、東側と北側が1～1.5mほど高い台地状になっており、東北角にわずかに城壁の痕跡が残っていた（図17）。また、東側の一部は破壊され、西に向かって幅の広い溝状になっていた。東側の南部は落差が不明瞭になり、南の董家林村の南側は3mを越す断崖になっていた。これは南の大石河の侵食によるものと思われる。西側は4～5mの高さがあり壕の跡と思われる所もあったが、そこが古城の西壁かどうかは確認できなかった。古城内は、東北部以外は建物やレンガ窯、溝などが散在し、保存状態は良くなさそうであった。

古城の東部、燕国墓地の所在地あたりには商周遺址博物館が建設中であった。1993年12月に完成、1995年に開館予定の掲示があった。

12 北京竇店古城

琉璃河古城を見た後、北3kmほどの所にある竇店古城を見た。この古城は、1986年にかなり詳しい調査がされている⁽³⁵⁾。古城は大城とその中に西壁を共有する小城とからなり、大城の城壁は内牆と外牆からなっている。内牆は戦国早期から漢代のもので、古城は漢の良郷県城と考えられている。また、時代、規模、版築の方法、地理的位置から戦国時代の燕中都の可能性もあるという。外牆は三国両晋時期に修建され、北朝時期には



図 18 北京竇店古城西南角（北に向って）

廃棄されている。小城の方は北魏時期のものであるという。

この古城の城壁は、南壁西部と西壁南部がよく残っていた（図18）。南壁東端は高さ3mくらいあったが、そこから東は城壁の痕跡は認められなかった。道で会った老人の話では、子供の頃は3mくらいの高さがあったとのことである。西壁南端は高さ5m以上あり、版築層も鮮明であった。小城の跡は時間がなく確認できなかった。

13 易県燕下都

7月5日、徐天進氏の案内で東京国立博物館の高浜秀氏とともに燕下都遺跡を見学した。北京からタクシーを雇い、京石公路を南下し、新城で西に折れて易県に向かった。北京から易県県城まで3時間近くかかった。

燕下都遺跡は易県県城の東南郊外にある。まず、東城中央の高陌村の東にある燕下都文物保管所を訪問した⁽³⁶⁾。案内された部屋には、下都の遺跡地図と1978年に西城中部の辛庄頭村30号墓から出土した金器のカラー写真が貼ってあった。保管所長の話では、西城内にはわりあい墓が多く、城壁が地上に残っているのは西城であるという。また、東城南部で発掘を予定しているとのことであった。ここではまた、東城東北外で出土の「郟王喜」の銘のある銅矛や鉞、「陶工」印のある陶壺を見せてもらった。陶壺は高さ50cmはある大きなもので、時々出土し、農民が実用器として現在でも使用している場合があるとのことである。

この後、西沈村の東、東城と西城の境の城壁を見た。道路によって断ち切られている所では高さ1.5mほどあった。また、古運糧河とされているその西側は幅数百メートルにわたってやや低くなっていた。次に、西城の西南角に向かった。城角村の南には南城壁の一部が補強を加えて保存してあった。その垂直の横断面には版築の版の幅と長さ、版に縄をかけて固定した跡などがくっきり残っていた（図19）。ついで、西城壁南端を見たが、現在でも5～6mの高さで北に延々と伸びていた（図20）。

また高陌村にもどり、北上して東城の北城壁外を東行した。道路から老姆台、張公台を遠望した後、東北角近くの観音台に登った。台は高さ10mはありそうであった。東に二段になった高い練台、西南に低い小平台が望めたが、やはり城壁らしきものは確認できなかった。

14 平山靈壽古城

8月9日と10日、法政大学の伊藤玄三先生、北京大学留学生の石黒ひさ子さんとともに石家荘を訪れた。そして、河北省文物研究所所長鄭紹宗氏および同研究所の孟繁峰、侶慶琪の両氏のおかげで石家荘市周辺の遺跡、遺物を見ることができた。

10日には、石家荘市の西北、平山県の中山国都・靈壽古城を見学した⁽³⁷⁾。平山県県城を通過した後、北上して滹沱河を渡り、下三汲村の手前から中山王墓に向かった。サツマイモ畑やゴマ畑の中に二段になった土台の上に二つの墳丘が見えた。東側の墳丘は東側半分が削り取られ、

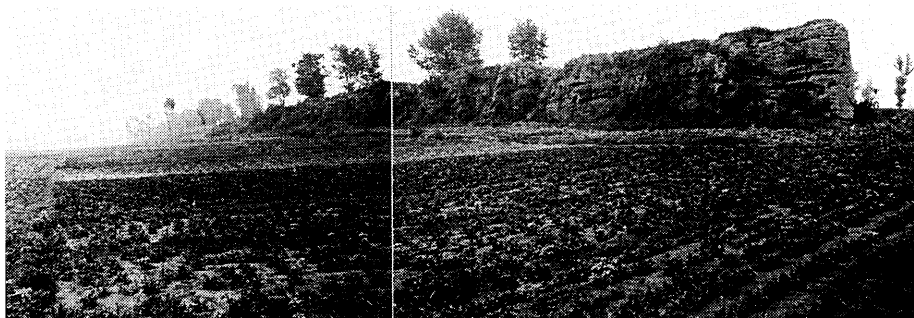


図20 易県燕下都西城墙南部



図19 易県燕下都西城南城墙横断面

その北側には大きな方形の穴が二つ開けられていた。ここは二号墓でまだ未発掘とのことであった。墳丘に登ると、北に東西の霊山が大きく迫り、なかなかの絶景であった。すぐ西側には一号墓、すなわち中山王譽墓の大きな墓坑が見下ろせた。一号墓の墓坑の下半分は確かに岩盤を掘り込んで作られていた⁽³⁸⁾。また、郭室に使用されたと思われる石塊が墓坑や


墓道にいくつものころがっていた。墳丘の版築層はきわめて明瞭で、雨ざらしのままにされていたとは思えないくらいであった。出土した「兆域図」によれば、一号墓の西にもう一つ墓があるはずであるが、土台は1号墓の西ですぐ切れていて平らな畑地がずっと続いていた。

この後、古城内の上三汲村に入り、村から北に向かう道路を白家岸村の近くまで上がった。道は途中、水渠のあたりからしだいに坂となり、白家岸村のあたりはかなり小高くなっていた。このあたりに「市」があったという話であったが、報告書の記述では上三汲村の東部ではないかと思われる⁽³⁹⁾。ともかく、地表にいくつか陶片を見かけたが、城壁らしきものはとうとう確認できなかった。

〔後記〕 今回の調査において、文中に挙げた方々を中心に様々な方々にお世話になった。とくに、北京大学考古系の徐天進氏には、何度か調査に同行していただいた他、紹介状を書いていただいたり、格別のお世話になった。また、北京大学留学生の石黒ひさ子さんにはほとんどの調査に付き合っていたいただき、また後藤雅彦君には山東と河南、小柳美樹君には山東と山西の調査に同行していただきお世話になった。最後になってしまったが、以上お世話になった方々に感謝の意を表したい。
(1994年10月)

注

- (1) 秦都咸陽考古工作站「秦都咸陽第一号宮殿建築遺址簡報」（文物1976-11）頁12，同上・劉慶柱「秦都咸陽幾個問題初探」（同上）頁25等。
- (2) 陳国英「秦都咸陽考古工作三十年」（考古与文物1988-5・6）頁127。
- (3) 靈壽古城。また最近，周原の鳳雛建築址の北約50mの道路の下でも周代の城壁が発見されている。さらに，曲村晋侯墓地の近くにも晋都があったと推定されているが，地表には城壁の痕跡は残っていない。
- (4) 菅見の限りでは，臨淄故城発見の陶文の報告例は1958年採集の12点のみである（考古1961-6，頁294）。これによって，なぜ近年報告例がないのか疑問が解けた。なお，北京大学考古系の高明氏に聞いたところによると，氏は以前，故城内で自ら陶文を発掘したとのことである。その一部は氏の『古陶文彙編』（中華書局，1990）に収録されているという。
- (5) 臨淄文物志編輯組編『臨淄文物志』（中国友誼出版公司，1990）によると，故城南面には何十という古墳が集中している。
- (6) 山東省文物考古研究所「齊故城五号東周墓及殉馬坑の発掘」（文物1984-9）頁14。
- (7) 臨淄区齊国故城遺址博物館「臨淄齊国故城的排水系統」（考古1988-9）頁784。
- (8) 群力「臨淄齊国故城勘探紀要」（文物1972-5）頁51。
- (9) 宮本一夫「新石器時代の城址遺跡と中国の都市国家」（日本中国考古学会会報3，1993）頁29。
- (10) 1994年9月初，陝西省の周原の地を訪問する機会があった。確かに，北に山波を望み，南に緩く傾斜する黄土台地という環境はよく似ていた。しかし，周原の方は，南北にいくつもの侵食の深い溝が切れ込み，あまり広々とした印象を受けなかった。曲村一帯の方は侵食溝もなく，はるかに広大で開けた感じがした。
- (11) 北京大学考古專業商周組等「晋豫鄂三省考古調査簡報」（文物1982-8）頁1，北京大学歴史系考古專業山西実習組・山西省文物工作委員會「翼城曲沃考古勘察記」（北京大学考古学叢書・考古学研究1，1992）頁124。
- (12) 北京大学考古系・山西省考古研究所「1992年春天馬一曲村遺址墓葬発掘報告」（文物1993-3）頁11。
- (13) 北京大学考古系・山西省考古研究所「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第二次発掘」（文物1994-1）頁4。
- (14) 注(13)報告。ただし，鄒衡「論早期晋都」（文物1994-1，頁29）は晋穆侯としている。
- (15) 3基の陪葬墓と31号墓は，山西省考古研究所・北京大学考古系「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第三次発掘」（文物1994-8）頁22に報告がある。
- (16) 注(11)考古学研究1・頁186。
- (17) 山西省考古研究所・北京大学考古系「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第四次発掘」（文物1994-8）頁4。
- (18) 山西省考古研究所侯馬工作站「侯馬呈王路建築群遺址発掘簡報」（考古1987-12）。
- (19) 呉氏によると，99体の献俘が発見されたとのことである。
- (20) 『左伝』によると，宗廟は宮殿（公宮）に近い所にあったようである。すなわち，哀公3年に「司鐸火，火踰公宮，桓僖災」とあり，襄公28年の「嘗于大公之廟，慶舍泣事，（中略）慶氏以其甲環公宮」の杜注に「廟在宮内」とある。また，秦都・雍城内の馬家莊1号建築址は秦国の宗廟の可能性が高いが，宮殿と考えられる馬家莊3号建築址と500mしか離れていない。
- (21) 山西省考古研究所侯馬工作站「山西侯馬牛村古城晋国祭祀建築遺址」（考古1988-10）。
- (22) 楊寛『中国都城の起源と発展』（学生社，1987）頁96。なお，呉氏によると，侯馬古城群の中，

- 白店古城は存在せず、品字形の城址であるとのことである。
- (23) 謝元璠, 張頌「晋陽古城勘察記」(文物1962-4・5) 頁55。
- (24) 山西省考古研究所, 太原市文物管理委員會「太原金勝村251号春秋大墓及車馬坑發掘簡報」(文物1989-9) 頁59。
- (25) 渠川福「太原金勝村大墓年代的推定」(文物1989-9) 頁87。
- (26) 1994年8月の太原での晋文化国際學術討論会に参加したおり聞いたところによると, 最近, 金勝村で251号墓より少し小さい墓が発見され, 大量の青銅器が出土したとのことである。
- (27) 鉄権は三個で, 一個35kg, 高さ16cm, 直径25cm。門枢は高さ52cm, 軸受部分は直径12.5cmであった。
- (28) 河南省博物館新鄭工作站, 新鄭県文化館「河南新鄭鄭韓故城の鉗探和試掘」(文物資料叢刊3, 1980) 頁59。
- (29) 一つは五宅庄出土。完形品で内高8cm, 内径11.5cm。もう一つは小高庄西出土。腹部がややふくれた高さ13.5cmの破片で「坪」の刻文があった。
- (30) 河南省文物研究所「河南温県東周盟誓遺址一号坑發掘簡報」(文物1983-3) 頁78。
- (31) 注(30)報告では, 1930年, 1935年, 1942年に出土して流散したとあり, 今回の村民の話と食い違っている。
- (32) 中国科学院考古研究所等琉璃河考古工作隊「北京附近發現的西周奴隸殉葬墓」(考古1974-5) 頁309, 魯琪, 葛英会「北京市出土文物展覽巡礼」(文物1978-4) 頁26, 中国社会科学院考古研究所等琉璃河考古工作隊「1981-1983年琉璃河西周燕国墓地發掘簡報」(考古1984-5) 頁405など。
- (33) 中国社会科学院考古研究所等琉璃河考古工作隊「北京琉璃河1193号大墓發掘簡報」(考古1990-1) 頁20。
- (34) 注(32)魯琪等論文。『北京百科全書1990』(奥林匹克出版社, 1991)の「琉璃河商周遺址」では, 北城牆829m, 東西城牆北段300mが残っているが, 東西城牆南段と南城牆は破壊がひどく不明とある。
- (35) 北京市文物研究所拒馬河考古隊「北京市寶店古城調査与試掘報告」(考古1992-8) 頁705。
- (36) 以下の地理的位置については, 河北省文化局文物工作隊「河北易県燕下都故城勘察和試掘」(考古学報1965-1) 頁84右, 図一を参照のこと。
- (37) 以下の地理的位置については, 陳応祺「略談靈寿古城址所反映中山国的幾個問題」(中国考古学会第三次年会論文集・1981) 頁233, 図一を参照のこと。
- (38) 河北省文物管理处「河北省平山県戦国時期中山国墓葬發掘簡報」(文物1979-1) 頁1。
- (39) 注(37)報告, 頁231では, 「市」は古城内中部, 東西に貫く古道路のあたりにあったとしている。